

第33回夏期福音特別集会 第1回聖書講筵

深みに乗り出でよ

——ルカ伝第5章1～11節——

伊東 1986年7月25日

小池辰雄

全存在が福音していく。唯だ一つのことを欠く。一人びとりが神に直結する。信仰は全存在的
な行為。然れど。信従。懼るな。今より後、人を漁らん。一対一の伝道。十二才の少年イエス
存在の中に福音が溶けている人。深みに乗り出だせ。

【ルカ5】

1 群衆おし迫りて神の言を聴きおる時、イエス、ゲネサレの湖のほとりに
立ちて、2 渚に二艘の舟の寄せあるを見たもう、漁人は舟をいでて網を洗
い居たり。3 イエスその一艘なるシモンの舟に乗り、彼に請いて陸より少
く押し出さしめ坐して舟の中より群衆を教えたもう。4 語り終えてシモンに
言いたもう『深処に乗りいだし、網を下して漁れ』5 シモン答えて言う『君よ、
われら終夜、^{よもすがら} 労したるに何をも得ざりき、然れど御言に随いて網を下さん』
6 斯て然せしに魚のおびたしい群を圍みて網裂けかかりたれば、7 他の一艘
の舟におる組の者を差招きて来り助けしむ。来りて魚を二艘の舟に満たした
れば、舟沈まんばかりになりぬ。8 シモン・ペテロ之を見て、イエスの膝下^{ひざもと}
に平伏して言う『主よ、我を去りたまえ、我は罪ある者なり』9 これはシモ
ンも偕に居る者もみな漁りし魚のおびたしきに驚きたるなり。10 ゼベダイ
の子にしてシモンの侶なるヤコブもヨハネも同じく驚けり。イエス、シモン
に言いたもう『懼るな、なんじ今より後、人を漁らん』かれら舟を陸につけ、
一切を棄ててイエスに従えり。

●全存在が福音していく

こんばんわ。33回というと、キリストが地上にいらつしやった——ルカ伝には「約三十年」
と書いてありますが——大体、地上のご生涯の年数、私たちは学んできたわけです。今回
はだいぶ珍しい方も来ていらつしやるので、大変うれしく思っております。

私は、このプログラムを書くのに一日かかった。というのは、書きながら、内容をじつ
と考えて、その焦点を結ぶ。そうすると、その次の一枚を書いていく。ちようど、朝から
晩までかかった。



ルカ伝4章14節、

「14イエス御霊の能力をもてガリラヤに帰り給えば」

ヨルダンのだいぶ下流の方のエリコのそばで、洗礼のヨハネから洗礼を受けられて、決定的な聖霊の降臨を彼は受けられた。天から、

「汝はわが愛しむ子、わが悦ぶ子」

という声があつて、聖霊が鴿のごとくにくだつてきた。あれはキリストのご生涯の決定的な瞬間の一つです。『無者キリスト』に「キリストの十転」というのを私は書きましたが、その中の一つです。

それで、24節の、

「24また言い給う『われ誠に汝らに告ぐ、預言者は己が郷にて喜ばるることなし』」

(ルカ4・24)

キリストは、この大預言者は歴史の終りまで、故郷ばかりではない、世界でも喜ばれない。喜ぶ人はごく少ない。福音というものは、万人が受けとられるものでありながら、これを本当に受けとる人はいかに少ないか。そういう非常に矛盾した現象です。キルケゴールが

「本当のクリスチャンは天才より少ない」

と言いました。その通りです。我々一人びとりはその天才より少ない一人に、皆さん――「皆さん」という言い方は十把ひとからげで、本当はよくない。あなた方一人びとりに向かつて、私は「あなたが」と言いたい――その一人にお成りくださいということです。

こちらにご厄介になつて、ちょうど三回目ですね。私はこちらに参りまして、部屋に入った。宿屋のお働きになつてゐる女の方がお茶を持ってこられた。ところが、右腕に包帯している。親指が動かないと言う。

「そうですか。ちよつとかしてごらん下さい」

と、手を取つて、私は黙つて30秒くらい祈りました。

「はいっ、治りました」

と。そしたら、楽に動くようになってしまった。これが今回の集会の第一の徴だった。

我々の福音は、パウロが言つておるとおり、言葉ばかりではない。全存在が福音していく。私は今ここで口でものをしゃべりますが、口でしゃべつてゐるのではない。全存在でものを言つてます。

今、世界は、霊が止まるこの霊止でなくなつた。神霊がとどまつていない。「人でなし」というが、20世紀の後半の世紀末的な大方の人は霊止でない。残念ながら。私も本来は霊止でないんです。ところが、キリストに捕まつてからは、この霊止になつた。もうありがたい極みなんだ。けれども、私は聖人でも君子でもありません。破れ器です。ところが、この破れ器をキリストはお使いになる。

「いわゆる立派な者はいらん。天国はこういうような人たちだ」



と、よく福音書の中に書かれてある。明日のお話の中にも出てきますけれども。

●唯だ一つのことを欠く

ルカ福音書は、もちろんパウロのお弟子さんのルカが使徒行伝とこのルカ伝を書いたわけです。ルカ伝というのは素晴らしい。非常に内容の豊かなものです。とてもこの三回や四回で話せるものではない。ただその一端を学ぶ。しかしながら、一端ではありますが、生命は一端において全生命がある。我々はルカ伝のほんの一端をかじるんですが、しかし、そこにおいて全ルカ伝を食べる。すべて、ことごらは量ではない、質である。そういう意味で、皆さんもルカ伝をずっと読んでこられたと思います。

まあ、何といつても、世界中に福音書の右に出づるものはないですよ。聖書中の聖書は福音書です。全世界のただ一卷の書は聖書。その聖書の中の聖書はやはり福音書ですね。詩篇ではない。イザヤ書は素晴らしいけれども、それは何といったって、福音書にはかなわない。まあ、大変な方です、キリストという方は。福音書を読んで、いい加減な気持ちでいられない。大体、これは読めないんです、降参しなければ。本当に降参して、その中におおそれなければ、福音書の扉は開かれない。そんなことは、普通の教会や今までの無教会でも、おそらく言わないでしょう。

ただ、無教会の塚本虎二先生はとにかくイエス伝に魅せられたね。先生の主たる研究はイエス伝です。塚本全集というのが出つつあるようですけれども、イエス伝がその大半でしょう。それくら綿密に研究された。あれが塚本先生の生涯の仕事であった。

けれども——私はここでは言わない方がいいかな。まあ、言ってもいいだろうな——塚本先生が脳軟化症かなにかでお亡くなりになる少し前に、私はお見舞いに行った。もうそれが最後でしたが。それから十年間、先生は誰にも会わないで、そのまま逝かれてしまった。そういう非常にお気の毒な病気でした。その時にはつきり私に言われた、

「僕の伝道は本当は間違っていたよ」

と。ということは、研究に行き過ぎたと。

「手島君と小池君のが本当だよ。しつかりやってくれ」

と。これははつきり言われた。そんなことを無教会で言おうものなら、大変なことになる。まあ、あなた方は無教会でないから、言うけれどもね。それは本当だから仕方がない。ということは、手島さんや私に聖霊の力が来ていることを先生は——感覚のいい方ですから——お分かりになる。内村鑑三、藤井武、塚本虎二、黒崎幸吉、矢内原忠雄、三谷高正、畦上賢造、みな一流の方です。人物としても、学問からいっても。それぞれの役割はみな果たして行かれた。けれども、一つ、

「唯だ一つのことを欠く」

というのがこの聖霊の事態です。私たちはそこに来ているわけです。だから、小さいグル



ープですけれども、一人びとりにもの凄い使命がかかっている。自分でも驚くようなことが展開していきますから。どうぞ、特に若い諸君は生命賭けで向かってくださいよ。私なんかいつ仆れても大丈夫だと思っています。

とにかく、私は「キリスト」と言えばもう言葉にならないです、いよいよもつて。

●一人びとりが神に直結する

ちよつと、パラパラ開きます。洗礼のヨハネが先触れをしたときに、

「お前たち、悔い改めろ」

と言った。「悔改める」とは「立ち帰る」ことです。預言者たちがさかんに言った「立ち帰れ」という言葉です。これはみんなアラミ語やヘブライ語で言ったんですから。「シユーブー」という字です。

「汝ら、立ち帰れ」

というのはただ「シユーブー」という言葉です。それで二人称複数なんです。ルカ伝3章のところ、

「⁸さらば悔改くゐあらために相応ふさわしき果みを結べ。なんじら「我らの父にアブラハムあり」と心のうちに言い始むな。」(ルカ3:8)

「自分たちは、我らの父にアブラハムありと心のうちに言うな」と。「アブラハムがある」ということは、非常にユダヤ人は血統を、伝統を重んずる。不思議なことに、ルカ伝にもその血統が、アダムからずっと書いてある。3章の23節あたりからずっと、そして遡って、

「³⁸エノス、セツ、アダムに至る。アダムは神の子なり。」(ルカ3:38)

と。系統を言っているわけです。大体、モーセまでが普通なんだけれども、アダムまで行ってしまっている。おもしろいね。そう言いながら、このルカ伝には預言者の言葉で、

「アブラハムありと思うな」

と書いてある。キリストも同じことを仰った。

「お父さんが信仰があるから、私もあるんだ」

なんて、そんな簡単にはいかない。信仰の世界は、一人びとりが神に直結する。親がどんなに善かろうが悪かろうが、神に直結する。

「各時代は神に直結する」

とランケが言いましたが、各人は神に直結する。全く一対一の関係です。「我」があつてそれから「我々」なんで、我々があつて我ではない。

「⁸……我なんじらに告ぐ、神はよく此らの石よりアブラハムの子等こらを起こし得給うなり。」(ルカ3:8)

と、凄いことを言うね。石からアブラハムの子を起こすぞと。石というのは、非常にイス



ラエルでは至るところにある。石の建築だしね。石が崩れてどうのこうのと、これはキリストの言葉にもある。

「この友が黙したら、石が叫ぶぞ」

とキリストは言われた。彼らの信仰の質というものは凄いだ。思われた世界ではない。その神さまの凄いことを言うのに、

「石から起こすぞ」

というような、こういう表現は科学的表現ではない。そういう言葉の気合が分からないと、聖書は読めないんですよ。

●信仰は全存在的な行為

そうしたら、

「何を為すべきか」

と、ここに三回出ている。どうしたらいいかと。さすがに、ユダヤ人は、

「何を知るべきか」

とは言わない。「為すべきか」と言う。実存の問題です。

「永遠の生命を受けるためには、どうしたら、何をしたらいいか」

と、あの青年が聞きましたね。

「永遠の生命というのはどんなものですか」

とは聞かない。そこがユダヤ人の素晴らしいところです。

私はこの頃、福音書を読んでいて——この頃でもないけれども——

「新宗教改革」

ということを言いましたでしょ。ということは、あまりにもプロテスタントが

「信仰、信仰」

と言って、特に無教会は

「信仰によって義とされる」

と言って、お題目になっている。空念仏になっている。ところが、福音書を虚心坦懐に読むと、キリストは

「聞いて行わなければ、天国に入れない」

と言われた。実存が問題だぞと。だから、信仰そのものも全部、全存在的な行為であるということに私は気がついた。内的な行為が本当の信仰だ。全存在でキリストの中に祈り入ること。だから、私は祈り入る、「祈入」と書く。ただここで坐っていて祈っているのではない。キリストの中に飛び込む。躍入する。躍り込むんです。「躍入」という言葉はヤスパーズが使った言葉ですけれども。躍り込まなくては。これが信仰の本質なんだ。

だから、「信仰と行為」なんて分けてどうのこうのと言う必要もなくなつた。真理は単純



な一つの世界、一の世界です。それが限りなく、多種多様に展開するだけのなしです。いつも、極まる場所は無と言いたい。何もありませんと。この

「何もない」

というのは、これは凄いだよ、本当に。私はいないんだよ、こんなところにね。

「では、人格はどうしてくれるんですか」

なんて、すぐそういう聞きかたをする。知らねえぞと言うんだ。ここは、

「何を為すべきか」

と聞いた。

「キリストのところに来い」

と言うことだ。

「行け。全存在でキリストのところに行け」

と。来たれと。「行け、来たれ」と。ドイツ語で「行く」という字は、「君のところに行くよ」というのは、「君のところに着くよ、来るよ」なんていう言い方をする。

信仰はそういう全存在的な、生命的なものです。あるがままの自分を――整える必要はない。そのままでもいいから――行けという。それで、キリストが「来たれ」と言う。その言葉に吸い付けられて進んで行く。行くも何もありません。知らない間に着いてしまったなんていうわけです。そういう気合ですよ、信仰の世界は。ちつとも難しくはない。

「私は疲れて行けません」

なら、ぶつ倒れたらいいよ、そこへ。

「ぶつ倒れたらと思ったらキリストの腕の中だった」

という、こういう世界です。もうはつきりしている。

バプテスマのヨハネは、

「私はダメだ。私は水でバプテスマするけれども、あの人は聖霊と火でもって

これは「聖霊と火の中で」と書いてある。

聖霊と火の中でお前にバプテスマをするんだよ」

と。「聖霊と火」ということは、火の如き聖霊の中でバプテスマをなさる。中へ入れてしまう。

だから、この特別集会でぶつ倒れたりいろいろするでしょ。大体、特別集会で救われた

方が多いんだよ。だから、特別なんだ。

「じゃ、普段はいい加減か」

と。そうじゃない。普段も、どうぞ毎回、特別にしてください。こういう聖書の句のところはちゃんと赤い線でも引っ張っておきなさいよ。黄色でもいい。とにかく、皆さん、

「聖書は自分の生命の延長です。もうこの聖書一巻あれば何もいりません。しかも、

聖書は私の中で活ける文字、活字になりました。もう聖書もいりません」

と。最後はそこだ。昔の坊さんはよくお経を暗記したものだね。イスラエル人はよく暗記



しているんですよ。少年の頃から旧約聖書を暗記させられる。なにさま、もう少し気違いにならないといかんね。

「神のためには狂える者なり」

というようなことにならないと。あまり、いろんなことがありすぎるんだよな、テレビだ何だかんだと。勉強の時間がどんなに少なくなってしまうか。「テレビを見るな」と言うんじゃないけれども、ちゃんと選んで見る。それは見て然るべきものはあるよ。これは見なければというものはあるんだから。

● 然れど

それで、そのヨルダンでキリストが聖霊にあずかって力を得て、そしてガリラヤの方に帰って来られた。そして、この5章というのは、最初の弟子ができたところの最初のところだよ。

「群衆おし迫りて神の言を聴きおる時、

もちろん、キリストの言は「神の言」です。

イエス、ゲネサレの湖のほとりに立ちて、

「ゲネサレ」とか、「ガリラヤ」とか、「キンネレテ」とか言いますが——「キンネレテ」というのは立琴のことです。ガリラヤ湖はちよつと琴のような形をしている。そこでそういう名前もある——「ゲネサレ」というのはその北の方の丘の地名です。それから見える湖だから、「ゲネサレ湖」という。「ガリラヤ」は地方の名前だから、「ガリラヤ湖」という。

2 渚に二艘の舟の寄せあるを見たもう、漁人は舟をいでて網を洗い居たり。

私もあそこへ一人で行ったときに、ちようど網を洗っている漁夫を見ました。細かい網の切れ端をもらってきた。ペテロもかくやというようなおじちゃんだったよな。

3 イエスその一艘なるシモンの舟に乗り、彼に請いて陸より少しく押し出さしめ

大勢いたからね。

坐して舟の中より群衆を教えたもう。4 語り終えてシモンに言いたもう『深処

に乗りいだし、網を下して漁れ』

いきなり、そういうことを言う。「深みに乗りいだよ」と。「深み」という言葉は別な訳し方をすると、「沖に」ということです。沖に乗りいだよと。これはギリシア語では「深み」です。深いところ。深いところは多少、沖になるからね。「網をおろしてすなどれ」と。もう、キリストは、何のためにこんなことをなさるか、ちゃんと先が見えておられる。

5 シモン答えて言う『君よ、われら終夜、労したるに何をも得ざりき、

これは漁夫だから、大体どこに何があるか、どれくらい採れるか採れないか知っているわけだ。ちつとも漁はなかつた。だから、



「私の判断ではとても行つたつてダメだと思っただけでも」と、そこまでは言わないけれども、

然れど御言したがに随したがいて網を下さん』

この「然れど」というのはただ簡単な、ギリシア語でいうと「デ」なんだ。ヘブライ語でいうと「ウエ」という字ですけれども。この「然れど」が大事なんだ。キリストも、「然れど」で生きていらつしやつた。

「わが意こころにあらず——然れど、汝の意である——汝の御意を成させ給え」というのは、自分の意志を否定しているんだ。

「私は十字架は本当はごめんです。だけれども、あなたの御意を成してください」

「お前は十字架にかかれ」

と。ゲッセマネの祈りは「血の滴るような祈り」とルカ伝に書いてある。いきなり天界にキリストは行つていいわけですよ、もちろん。エリヤのようにね。けれども、キリストには大事な使命が、誰も負えない使命がある。それは贖罪という使命です。

今日は金曜日だな。十字架の金曜日です。金曜日とは何か不吉な日だといって嫌うけれども、冗談じゃない。私は金曜は大好きだ。贖いの日だから。十字架の日だから。金星はビーンナスというんだけど、キリストはまた本当に金色に光っている。十字架の金曜日。だから、金、土、日というのは、これははずせないんです、我々の集会としては。金曜は十字架、土曜は聖霊が動きだした。そして、日曜日はキリストの復活。だから、二泊三日というのが、十字架・聖霊・復活と、こうきているわけだ。今度の話も大体そうなつてきますから。

この「然れど」を我々は自分に対して——「然れど」と人に向かつて言うのではない——自分に向かつて、

「だけど、お前は自分の意志を棄てろ」

と。自分に対して、「汝」という言い方がありますね。

「あなたが仰るから、この我なる内側の汝を否定する」

と。自分の漁夫としての経験や知識や、それをみんなここでもって片づけてしまふ。乗り越える。生来の理性も悟性も感情も乗り越える。汝の靈性に従う。これがこの「然れど」なんです。

だから、毎日、自分を乗り越えて進んで行く人は、この「然れど」で生きている人なんだ。自分に対して「ノー」(否)と言う人は、キリストに対して「イエス」(然り)と言う人なんだ。キリストに対して「イエス」と言いながら、自分も「イエス」だなんて、そんなむしのいい話はない。我々はダメなんだから。無能力者、罪びとなんだから。大体、罪びとなんだ。「罪びと」というのは、我執者、己に執している者、利己主義者、エゴイストだ。

「エゴ」というのはギリシア語で「我」という字です。誰でもがみんなエゴイストである。ということば、



「万人はこれ罪びとなり」

ということ。このエゴをいかにして乗り越えるかというのが、みな宗教者が非常に苦しんで——禅宗であろうと日蓮宗であろうと浄土宗であろうと浄土真宗であろうと——あの第一流の坊さんたちはみんなこの問題で突破した連中なんだ。突破の仕方はいろいろだけれども。

良寛は、岡山の一角の寺で20年修行して、全くそこで自己から抜けてしまった。あれは本当に

「幸いなるかな、貧しき者」

なんだな、あの良寛というのは。鉢一つしか持っていない。ご飯も煮れば、顔も洗えば、雑巾もかければ、何でもその鉢を使っている。布団は一つしかない。盗人が来て、自分の布団も欲しがっているから、良寛はわざと少し布団をはいだ。これはしめたと盗って行ってしまった。もう何も無い。

「盗人のとりのこしたる窓の月」

窓の外に月がある。あれだけは持つて行かなかったと。これだけの句が本当に言えるよ。うな人はいないんですよ。俳句にしろ和歌にしろ、本当に全存在で告白したのは、まずい。うまいのなんていう範疇じゃない。そういう句を読んで、

「参りました!」

と言わなくてはダメなんです。私の著作集第八巻『詩歌集』の中の私の和歌も、すざびでつくったのではない。あの和歌は、それぞれの瞬間において生命をうちこんで書きました。

● 信従

そういう「然れど」です。御言に従っていく。

5……然れど御言したがに随したがいて網を下さん。

この「従って」も、いやいやではダメですよ。

「本当にキリストだ。必ずこれはえらいことなる」

と言って従うのでなければ。

藤井先生がよく「服従」ということを仰った。何か私はその「服従」という言葉に——何か或る抵抗ではないけれども——何か割り切れないものを感じていた。むしろ、「信従」と言いたい。しかし、藤井先生は本当にキリストに信従していた方です。素晴らしい実存です。私の恩師として私は無条件に敬意を表します。それは人間だからいろいろ癖はありますよ。すべてがいいなんて言ってませんけれども。先生が亡くなった時には、

「江戸っ子は宵越しの金を使わない」

という調子でね、財布の中は空っぽなんだ。借金もなければ貯金もない。そういう方だった。お子さんたちが四、五人いるのに、どうするのか。そんなことは知らんと。ただ神さまに、



キリストに従って生きていた。先生の著作が、全集が出たら、その印税でお子さんたちの学費や何かができてしまった。そのことで骨折したのは矢内原先生ですけれども。とにかく、全存在で喜んで従うことは必ず成る。けれども、ペテロはそこまでの気持をこの時に持っていたかどうかは知りませんよ。ところが、びつくりしたから。

6 斯て然せしに魚のおびた^{きた}だしい群を圍^{かこ}みて網裂けかかりたれば、7 他の一艘の舟における組の者を差招^{きた}きて来り助けしむ。来りて魚を二艘の舟に満たしたれば、舟沈まんばかりになりぬ。

「ほとんど沈みそうだ」という表現になっている。

8 シモン・ペテロ之を見て、イエスの膝下^{ひざもと}に平伏して言う『主よ、我を去りたまえ、我は罪ある者なり』

これは正直な言葉だ。

「大変な方です、あなたは。まさかと思つていたところが、仰るとおりだ」と。だから、この時の従つたのは、「まあ、仕方がない」と言つて従つたんだ。

「だけれども、仕方がない。あなたが仰るなら」

と。ところが、実際はこうなつていた。それで今度は、ここで本当に参つてしまった。そこで、

「主よ、我を去りたまえ、我は罪ある者なり」

と言つた。これはキリストが去つたらどうということになるんですか。ペテロの言いそうなこと、「去りたまえ、我は罪ある者なり」と。彼は正直だ。

「もう、とんでもない。あなたはまぶしい方だから。私みたいなまつ黒なやつから、どうぞ、去つてください」

と。「去りたまえ」ではない、逆に「私は逃げます」と言つたらいい。

実はこれと同じことをペテロはまた言っているんだよ、「洗足」のところ。ヨハネ伝13章のところ。です。

「3 イエス父が万物をおのが手にゆだね給いしことと、己の神より出でて神に到ることとを知り、4 夕餐^{ゆうげ}より起ちて上衣^{うわぎ}をぬぎ、手巾^{てぬぐい}をとりて腰にまとい、5 ついで盥^{たらい}に水をいれて、弟子たちの足をあらひ、纏^{まと}いたる手巾にて之を拭^{ぬぐ}いはじめ給う。6 斯てテモン・ペテロに至り給えば、

ペテロが一番終りらしいね。

彼いう『主よ、汝わが足を洗い給うか』7 イエス答えて言い給う『わが為すことを汝いまは知らず、後に悟るべし』8 ペテロ言う『永遠に我が足をあら

い給わざれ』イエス答へ給う『我もし汝を洗わずば、汝われと關係^{かかわり}なし』(ヨ

ハネ13・3～8)

ここでも、「永遠に洗い給うな」なんて、畏れかしこんで言つたんだ。



「私みたいなどんでもないものに、足なんか洗っていただけは大変だ」
 「けれども、お前の足を洗わなかったら、お前と私は関係ないんだぞ」
 と、キリストの方は。キリストは私たちの足を洗いいらっしやった。足の裏は一番汚れるところだから。

ここでも「去り給え」で、同じ気持なんだ、やっぱりペテロは。

「恐れおおいから、どうぞあちら行ってください。恐れおおいから、どうぞ足を洗わないでください」

「そうじゃない。お前を本当に捕まえようと思って私はやっているんだ。逃げてはダメだよ」

と言う。皆さん、逃げてはダメですよ、正直。この福音から逃げたら、行くところがなくなってしまふ。まあ、一遍逃げてごらん。また戻ってくるから。ところが、戻ってこないのがあるね(笑)。いつ戻って来るかなと思っているんだけど。

「小池先生なんてのはデタラメだから、スエーデンボルグの方がいい」
 なんて言つて。どうぞ、行つてください。

私の中に御霊がなければ、あなた方はどんどん逃げて行つていいわけだ。だけれども、私の中に御霊が光っている限り、人間小池がどうであろうと、この破れ器をとおして金剛石よりも素晴らしいものが来ている。皆さんがそれに共感して、あなた方の中にも同じものが灯っているから、やつて来るわけだ。

● 懼るな

9 これはシモンも偕に居る者もみな漁りし魚のおびただしきに驚きたるなり。

「魚のおびただしきに驚いた」ばかりではしょうがないんだ、本当は。おびただしいのに驚いたつて、ダメだよ、そんな現象に驚いたつて。なぜ、キリストに驚かないか。それは一面、キリストに驚いたから、

「どうぞ、あつちへ行つてください」

なんて言つただけけれども、とんでもない言い方をした。けれども、正直に書いてあるからいい、この福音書というのは、何も飾らないでね。

10 ゼベダイの子にしてシモンの侶なるヤコブもヨハネも同じく驚けり。
 みんな驚いた。

イエス、シモンに言いたもう口『懼るな、なんじ今より後、人を漁らん』か
 れら舟を陸につけ、一切を棄ててイエスに従えり。

この「懼るな」です。我々は懼れ疑つたらダメです。私なんかは大体、生まれつき非常に臆病なんだ。臆病の意気地なしの泣き虫なんだ。だから、私は自分で不思議でしょうがない。今は怖いものはないものね、正直。



それは、キリストと一つになつていけば、「懼るな」どころではない。うれしくてしょうがない。力が来てしようがない。行き詰まれば行き詰まるほど、いろんなことに出つくわせば出つくわすほど、逆に力がきます。本当です、これは。皆さん、いろんな問題が身边にあるね。どんなに行き詰まったつていいよ。逆に聖霊の力がくるから。でなければ、本当に聖霊を受けていることではなくなる。

「どうもちよつと調子が悪いんで、祈ってもダメです」

なんて。何が「祈ってもダメ」か。祈り入らなければダメなんだ、キリストの中に。投げ入れなくては。

少し飛び込みをやるといいよ、飛び込みを。初めは恐がつている。もつとも、高いところからいきなり飛び込んではいけませんよ。背骨をグツとやられると危ないから。まあ、泳ぎの方は段階はありますけれども。

どんな偉そうな人であろうと、総理大臣であろうと、何であろうと、ひとつも恐くはない。むしろ、ああいう連中を少し知りたいね、僕は。言いたいことを本当に言いたいけれども。誰かそういう人を知っていたら、紹介してくださいよ、お話しするから。今度の第九卷（『感想と紀行』）で私はいろんなことを書くつもりだけれども。

●今より後、人を漁らん

「懼るな」というのは、

「もう、お前は懼れることはないよ」

ということだ。

「もう何も恐いことはないよ。とんでもない。あつちへ行つてくれではない。私はいよいよお前をとつかまえて、お前を使うぞ。今より後、人を漁らん。この大

漁のように今度は、人の本当の大漁をお前はすることになるぞ」

と。ペテロは、生きているうちにはそうでなかったけれども、ローマン・カトリックの、とにかく元祖になつてしまった。福音書のペテロなんていうのは、沈んだり浮いたり、始末がわるい。躓いたり転んだりしている。しまいには、三度キリストを否んだりして、さんざん泣いたけれども、どうにもならん。ところが、聖霊が来た使徒行伝7章くらいまでのペテロはどうですか。ああいうようにガラリ変わってしまった。

「今までがどうだこうだ」

なんていうことではないんです、この聖霊の世界は。本当に人新たにされるんです。だから、み霊のことは体験するまでは、どんなに説明しようが、どんなに本を読もうが――悪くはないけれども――それではまだダメだ、自分で、本当に体験するまでは。その体験は本当に、

「われキリストとともに十字架せられたり、もはやわれ生くるに非ず、キリス

ト――み霊のキリストが――わが内に生き給うなり」



と、パウロと共にこの告白が出来るまではダメなんです。

「信仰によつて義とされる」

という句はプロテスタントの金科玉条なんだ。ところが、みんなあれが観念になってしまっている。私も無教会にいたときに、「信仰によつて義とされる」ときんざん聞いた。

まあ、私は今度、第八巻（『詩歌集』）を、無教会でもこの人なら読んでくれるかなあと思つて、送つたところが、やつぱり返事はパリサイ的な返事だ。全く病膏盲に入つている。私は二言目には「無教会」なんて言うものだからね、皆さんは何のことだか分からない。パリサイです。無教会の人を悪口言っているのではない。無教会全体の信仰の傾向がそういうところにあるから困つたものだという事です。

● 一対一の伝道

皆さんも——キリストは「今より後」と言われた。いつも「今より後」なんです。今から。明日からでない。今晚から——人を漁すなるんです。一対一の伝道をする。

私は、「全十二召団の歌」（1986.4.19作）というのを、30節のものをスラーツとひと朝で書いた。そして、第29節に（独唱。一高寮歌「アムール河」の歌調）、

「聖霊の愛は力あり、

火よりも熱き愛なるぞ。

十二召団証しせよ、

一対一の伝道を」

と書いた。

一対一の伝道をする。老いたるも若きも、男も女も、本当にこの福音を伝えずにはいられない。『エン・クリスト』誌をカバンやハンドバックに入れておいて、人に上げてほしいよ。クリスチャンは一番遠慮深くていかん。あまり折伏しやくぶく的なことをやってはいかんけれども、

「ああ、この人には何とか伝えてやりたいな」

と思つたら、無駄だつていいよ、それをやらなくては。学校でもそうだ。今、そういう先生はごく少ない。この集会には、二、三人の大事な先生方がいらつしやるが、是非ともやつてください。

「今より後、人を漁らん」

とは、ペテロに言つてるのではない、我々一人びとりにこれを言つてらつしやる。我々の日常生活のうちにこの恵みのキリストの力が体現されてくる。そうしたら、それを人に分かち与えないではいられない。

人のために祈るときは、キリストの中に自分を本当に入れて祈ってくださいよ。私は、夜の十時になると祈るんです、誰れ彼となくに。そして、知っている人だと、祈りの中でそ



の人の家のその部屋へ自分が入っていつてしまう。そのうちに顕れるかもしれないけれどもね。そして、そこでもってグッと、滞在して祈るような気持ちになって祈る。だから、私を家へ招いていない人はダメだよ(笑)。祈りが具体化しないから。まあ、半分冗談ですけどね。いや本当だよ、それは。でも、みんなに招かれては困るよ私は、何もできなくなるから。

私の祈りは時間が非常に短い。グッと入ってしまふから。時間の長短はその一人びとりによっていろいろだから、どうでもいいよ。いろんな人のために祈っても、15分か20分だね。それで、自分で躍動してしまふ。さつきだつて、もう祈りを聞いていたら、異言が爆発してしまうものな。

11 かれら舟を陸につけ、一切を棄ててイエスに従えり。

素晴らしいね、こういうところが。従つたけれども、残念ながらまだ本当の従い方ではなかった。まあ、いいよ、それはどうでも。本当に従つたのは使徒行伝から、聖霊が来てからだ。けれども、とにかくペテロは従つた。そういうところもちゃんとキリストは人を見ておられる。魂の気合のない人はダメだよ、善い悪いの世界ではない。どうだこうだではないんです。

●12才の少年イエス

12才の少年イエスの記事はルカ伝にしかないから、ちょっと言っておきましょう。ルカ伝2章。過越の祭りのときに、イエスはお父さんとお母さんと一緒にエルサレムに行った。そして、神殿で彼は残っていた。ところが、両親が帰つてしまつてから三日もたつて、

「あらら、イエスがいないな」

と気がついて、マリヤが戻つて来た。

「三日ののち、宮にて教師のなかに坐し、かつ聴き、かつ問い居給うに遇う。

聞く者は皆その聡と答とを怪しむ。両親イエスを見て、いたく驚き、母は言

う『兒よ、何故かかる事を我らに為しぞ、

お母さんは怒つてしまつた。

視よ、汝の父と我と憂いて尋ねたり』

お母さんの言いそうなことだね。

イエス言い給う『何故われを尋ねたるか、我はわが父の家に居るべきを知ら

ぬか』(ルカ2・46、49)

これは「父の家に居る」ではないんです。

「父の事柄にたずさわつていることが、お分かりでありませんか」

という言葉です。この「べき」は強い。ギリシャ語でいうと、「デイ」が使つてあります。

「私はこの神殿で坊さんたちと父のことにたずさわつていないではいられないの



だ」

と。これは、

「どうしても、そうしなければいけない」

という言葉です。「父の事柄、父の事態」なんです。だから、12才の少年イエスは、全く父なる神の懐に入っているようなひとだ。父がいつも彼の根源意識の中心になっている。父と一つなんだ。親孝行といえ、これほどの親孝行はない。本当の親孝行だ。地上的な親不孝的にみえたが、実は本当の親孝行なんだ。

ヨセフのことはほとんど書いてないものな。後からマリヤのことは少し出てくるけれども。聖霊の子だから仕方がない。いくらヨセフの伝統があつたって、ダメなんだ。キリストは伝統でありながら、伝統を破っている。本当の創造というのはそうなんです。伝統を一応重んずるけれども、伝統を乗り越えなければ、本当の意味で伝統を活かすことにならない。これが普通の常識とは違う。

●存在の中に福音が溶けている人

皆さんは、しかし、いろんな職業に就いていますね、結構ですよ。ただ、すぐそれをやめて伝道しろなんて言っているのではない。それぞれの職業で、そこにおいて本当に証人である。これが本当の漁人すなざりびとです。何をしていても、それにおいて証あかしがされていく。いきなり、ただ聖書の話をするのでも何でもない。時には、それも大いにやってください。

とにかく、人間はみんな実は行き詰まっているんですよ。いろんな事でごまかしているだけの人はなしだ。そして、本当になにか重大なことにでつくわすと、

「いや、正直これはどうにもならん」

と行って救いを求めてくる。ところが、必ずしも入れるとは限らない。とにかく、普段、聖書の世界に溶け込んで、存在の中に福音が溶けている人に——塩が海水に溶けているように——福音が溶けているような人になると、いざとなるとそれが本当に塩の味を現す。また、光が溶けているから、その光がものすごく輝く。

「一切の秘訣を得たり」

ということになる。それぞれの所で、それぞれに調子を合わせながら、実はその調子をもうひとつ破るものを持っている。そして、人を本当の意味で驚かす、

「なるほど福音は」

と。D学園の中興の祖といわれる天野貞祐先生は——私は第八卷（『詩歌集』）の中に「わが人生」という詩を書いたでしょ、読みましたか。読んでくださいよ、少しね——あの天野先生は「道理の感覚」で有名な人だ。道徳を論ずるけれども、

「実行していないことはひとつも言っていないかん。実行していないことを言うのはダメだ」



と。天野先生の本当の強さはそこにある。とにかく、あの人は実践して動いていた。

福音も、本当に福音を福音していなければ、これは語ってはダメなんです。いわゆるお説教になる。お説教なんかで人は動きはしませんよ。

だから、ゲーテが

「初めに言葉あり」

というヨハネ伝の最初の言葉を、ファウストをして

「初めに行為あり」(Im Anfang war die Tat.)

と訳した。あれは本当にすごいよ。はじめに行為あり。それからものを言うんだと。イスラエルの神ヤーヴェーはエジプトからモーセをして出エジプトさせてやった。その恵みの行為の後で、モーセに十戒を与えた。言葉が後なんです。本当の実言であるためには、行為が実現して先んじていなくては。「初めに行為あり」ということです。

「聞いて行わざれば、天国に入れない」

とキリストが言っているんだから。キリストはさかんに言っているんだ、実存しなければダメだと。

「さあ大変だなあ、実存は」

なんて、そういうことを思う必要はない。このキリストの力の中に、生命の中に入れば、動かざるを得ない。力が発せざるを得ない。実現せざるを得ない。

「ざるを得ない」

世界なんです。大変ではない。ざるを得ない世界で動き出しますから。推進力が来ているから。その行為の質は愛です、究極においては。

十二召団にはもはや問題はありません。

「いろいろな問題がたくさんあっても、そんなものはほとんど乗り越えていきます」

と、はつきり言えなくては。

「誰がどうだ、ああだこうだ」

なんて、そんなことを言っていることではない。お互いに本当に助けあい、忍びあい、赦しあう。それが聖霊の世界でしょ。サタンにはなめらてはダメだよ。

「サタンよ、退け」

「われ既に世に勝てり」

とキリストは言われた。

●深みに乗り出だせ

それで、「魚が無い」と思ったその現実において、実は本当に魚は採れるということ。キリストは実証された。これは、

「お前たちが本当に私に従って行けば、今度はお魚を採るところのさわぎではない。」



今より後、人間を漁るぞ」

と。それを実力をもつて、キリストは諭された。言葉できとしたのではない。事実をもつて諭した。やはりこれも行為なんです、キリストも。福音は正に行為なんです。だから、福音書の各頁にキリストの驚くべき力が現れているでしょ。キリストには、力に、行為に、実存に裏づけられていない言葉はひとつもない。

「初めに行為あり」

と、正にそうなんだ。初めにして終わりなんだ。ゲーテの『ファウスト』第二部のところに、「行為が一切だ」(Die Tat ist alles.)

という言葉がある。とにかく、ゲーテというのは凄い人です。だから、ゲーテという大詩人は普通の人には分からない。藤井先生でも、

「ゲーテには気をつける」

なんて言う。いろんな恋人が次から次へといたものだから(笑)。そうではないんだよ。そんな現象をただみてたらダメです。ゲーテは女性を一つも捨てはしないよ。ちゃんとそれぞれの交わりをしている。その時その時に、本当に彼をどんどん展開させたような女性たちが現れているわけです。あの女性たちはみんな素晴らしい。

話とぶけれども、いいですか、女性は歴史をつくるんですよ。大体、偉い人のお母さんというのみんな魂の質がいい。あなた方、女の方が大分いるけれども、第二の国民の育ての親になってくださいよ。今の学校の教育なんてものはあてにならない。ダメだからいじめだとか何だとか、何をいつてるか。日本の教育はもうしょうがない。先生方自身が本当に宗教の世界に入らなかつたならばダメなんだ。問題は先生の問題なんです。それから、親の問題です。若い人たちがどうのこうののではない。今の若いお母さんたちは戦後の教育だから、みんなそれぞれ気の毒なんだ。だから、自分でもって本当に道を開かなければならない。

また、テレビが、コマーシャルが悪い。妙なものばかり、すったもんだの事ばかりやっているだろ。あれは冗談じゃない。子供たちも、妙な化け物みたいなものを喜んで見ているから、みんな感覚がおかしくずれてしまった。日本は、本当に目覚めなければダメなんです。

だから、あなた方はものすごい使命を負っている。どの環境においても、敢然として福音の証者となっていたただかなくては。教育の根底に本当に福音の光がなければダメなんだ。観念ではない。

だから、我々は本当にキリストから今日、

「汝らは今より後、人を漁らん。人をすなごれ。本当の一对一の伝道をしていけ」と言われる。皆さんが伝道者です。

「深みに乗り出だせ」



というのは、

「聖書の神の中にいよいよ乗り出だして、聖書の眼光紙背に徹する読み方をしろ」ということです。

私は著作集の第十一巻と十二巻を止めた。そんなことやっている暇がなくなつたから。というのは、もうじき死ぬからではないよ。もう一つ大きな仕事があるから、十二巻を止めて、全十巻にした。『旧約抜粹』と『新約抜粹』をやめた。

あれは『エン・クリスト』の中に少しづつ載せていただくか、私が向こう側にいつてからあなた方がやってくださるかなんか知らんが。とにかく、『エン・クリスト』は十二召団の機関誌ですからね、聖霊の雑誌ですから、お互いに助けてどこまでも続けてください。ケケケチしてたらダメですよ。お金の問題でケケケチしてるようなことではダメなんだ。

「福音のためには惜しみなくやれ」

ということとは、コリント後書でパウロが言っている。「惜しみなくやれ」と。これは、我々の共同の伝道なんです。何か証言したいことがあったら、どんどん書いてください。一定の人たちばかりが書いては困るよ。さっぱり私のところに原稿が来ないからね。

「こういうことを体験しました」

と、遠慮なく書いてよこしてください。もちろん、いろんな種類のもを載せます。本当は20頁では足りないんだけど、それ以上のことは今のところはできませんから。まあ、ちやうど季刊誌で、春夏秋冬出すくらいが、今のところちやうどいいから、無理はしないけれども。本当にまだちよつと伝道の意識が足りない。それぞれの所で本当に伝道ができるんです。

「どうだい君、こういうものをひとつ…」

なんていうことだね。

「来たりて見よ」

という世界ですから。

だから、この

「今より後、汝ら人を漁らん」

というのは、あなた方一人びとりに言われているキリストの言葉として受けとっていただかないと。それで、実行しなければダメなんだ、正直。

もはや信仰でない。行の世界なんです。それが本当の「信行」だということを、改めて自覚していただきたい。自覚ならざる自覚です。そうやって行きましょう、本当にね。それでは、これから祈りましょう。

